

## パニウム - 第十六番

### 終わりの時

Jeff Pippenger

2026-02-19

ダニエル書第十一章は、聖書預言における第六の王国の最後の大統領としてドナルド・トランプを提示することから始まる。第十章で幻が始まった起点である「キュロスの第三年」という表現は、第十一章第一節の「また」という語によって補完されている。

また、私自身が、メディア人ダリウスの治世第一年に、彼を堅め、力づけるために立った。ダニエル書 11:1.

ガブリエルは、第十一章の叙述を始めるにあたって、周到にダリウスの時代にまで遡り、ダリウスをキュロスと結びつけている。第十章は、一つの幻として第十二章の最終節に至るまで続いており、その始まりはキュロスの第三年である。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

ダリウスはキュロスとともに、メディアとペルシアという二つから成る国家の象徴をなす。これは、アメリカ合衆国における共和主義とプロテスタンティズムという二重の勢力を表し、ゆえに、終わりの時の二重の象徴となる。古代イスラエルの初めにおいて、アブラハムの四百年の預言の終わりの時を画したのは、アロンとモーセの誕生であった。同様に、古代イスラエルの終わりにおいては、バプテスマのヨハネとキリストの誕生が、終わりの時の二つの標識を表した。イエスは常に、初めをもって終わりを示される。

ダリウスとキュロスは共に、バビロンにおける七十年の捕囚が終結した時、すなわち「終わりの時」として示される道標を象徴している。

「地上の神の教会は、この長く容赦のない迫害の期間中、捕囚の期間にイスラエルの子らがバビロンで囚われていたのと同様に、まさしく捕囚の状態に置かれていた。」  
『預言者と王たち』714ページ.

ダリウスとキュロスは、終わりの時を表す1798年と1799年を予表している。その時、霊的バビロンにおける霊的イスラエルの並行した捕囚は終結した。1798年は、ローマの淫婦がその上に乗っていた獣に象徴される教皇権の政治体制の終わりを画した。

それで、彼は私を霊において荒野へ連れて行った。そして私は、冒涇の名で満ち、七つの頭と十本の角を持つ緋色の獣の上に座っている女を見た。黙示録 17:3

ナポレオンは1798年にその獣の命を絶ち、1799年には、その獣に乗っていた女が流刑の地で死去した。1989年には、ロナルド・レーガンとジョージ・ブッシュ（父）の双方が大統領であり、1989年は終わりの時を画する年となった。ダレイオスとキュロスは、ロナルド・レーガンとジョージ・ブッシュ（父）を表す。第二節はこう述べる。

今や、わたしはあなたに真理を示す。見よ、ペルシアにはさらに三人の王が起こり、第四の者は彼らすべてにまさってはるかに富むであろう。そして、その富によるその力をもって、彼はすべての者を奮い立たせ、ギリシアの王国に敵対させるであろう。  
ダニエル書 11:2

## 覚醒

ダリウスはレーガン、キュロスは小ブッシュであった。キュロスに続く三人はクリントン、小ブッシュ、分断者たるオバマであり、その第四の「はるかに富める」大統領としてグレスリアのグローバリストたちを目覚めさせたのはトランプであった。「stir」という語は、目覚めさせることを意味する。2015年にトランプが出馬を表明したとき、ヨエルが「異邦人」と同定するグローバリストたちは目覚めさせられた。

諸国民は目覚め、ヨシャパテの谷に上って来よ。そこでわたしは座して、周囲のすべての諸国民を裁くからである。鎌を入れよ。刈り入れは熟したからだ。さあ、下って来よ。酒ぶねは満ち、酒槽はあふれ出ている。彼らの悪がはなはだしいからだ。群衆、群衆が、決定の谷にいる。決定の谷において、主の日は近いからである。ヨエル書 3:12-14。

「異邦人」が呼び覚まされるとき、「ヨシャパテの谷」において「主の日は近い」。 「ヨシャパテ」は「エホバの裁き」を意味し、その谷はまた「決断の谷」とも呼ばれる。2015年以降、神に仕える決断をしないために人々が持ち出すそれぞれの言い訳に応じて用意されたさまざまな束の中へと、地球上の「群衆」は移り始める。9/11に生ける者の裁きが始まり、2015年にはドナルド・トランプが大統領選への出馬を表明した。9/11に「後の雨」の第一段階が降り始め、後の雨こそが作物を結実に至らせるのであり、そして、熟した収穫を生み出すその雨が始まってから十四年目に当たる2015年に、ヨエル書は、ドナルド・トランプが「ギリシアの国を奮い立たせる」とき、すなわちヨエルの言葉で言えば、トランプが「2015年に異邦人を目覚めさせる」とき、地球の収穫が熟し始めていることを警告している。

ダニエル書十一章において最初に言及されている真理は、ドナルド・トランプの預言的役割である。ダニエル書に描かれる聖書預言の第一の王国はバビロンである。もしネブカドネザルが、預言的範型を確立するために靈感によって用いられることがなかったとしたら、ダニエル書におけるバビロンの物語がいかなるものであったかを想像してみよ。聖書預言における第六の王国は、その王国の最後の支配者の証言がなければ不完全である。三週間の断食の後、第二十二日目にダニエルが受けた幻において、初出の法則は、トランプを最重要の象徴とする意義を確立する。

しかし、ペルシアの国の君が二十一日間、わたしに立ちはだかった。だが、見よ、かしらたる君たちの一人であるミカエルが、わたしを助けに来たので、わたしはそこにあってペルシアの王たちのもとにとどまった。今、わたしは、終わりの日にあなたの民に何が臨むかを、あなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日にわたるからである。ダニエル書 10:13, 14

第十一章の幻は、終わりの時に神の民に起こることを描き出しており、また、トランプがアメリカ合衆国の指導者であり、さらにその後に国際連合の指導者となるという事柄

は、それを理解するか否かが永遠に関わる帰結をもたらす真理である。その真理はガブリエルがダニエルに伝えるべき事柄として極めて重要であったため、十四節において、ダニエルは天使ガブリエルから与えられた光に基づき、幻を成就させるのは「あなたの民を略奪する者たち」であると記している。ダニエル書十一章の預言的歴史を通じてトランプの足跡を識別するにあたり、ローマを型として用いなければ、預言におけるドナルド・トランプの動向を正しく追うことは不可能である。

日曜法の時期において、アメリカ合衆国の象徴としてのトランプは獣の像を造り、そのことによって彼は獣に栄誉を与えている。したがって、それは獣の像であると同時に、獣に栄誉をささげる像でもある。黙示録17章では、教皇権は第八であり、すなわち七に属する者であるが、ドナルド・トランプは1989年の終わりの時におけるレーガン以降で数えて八人目の米国大統領であり、しかも六人目でもある。すなわち、彼は七に属する第八である。

ヨハネの黙示録第十七章において、ヨハネは三節で荒野へ運ばれ、そこで獣にまたがる大淫婦を目にする。終末の時代に至っては彼ら自身がその根本的信条を否認しているとはいえ、この大淫婦は、すべての主要なプロテスタント諸教派によってカトリック教会と同定されてきた。ヨハネが彼女を見たとき、ローマ教会は殉教者たちの血に酔いしれており、また彼女は「淫婦どもの母」という称号を帯びていた。これは、ヨハネが1798年へと移されていたことを示している。そこでは教皇権は殉教の血にまみれ、かつてのプロテスタントのいくつかの教会はすでにローマ・カトリックの交わりに回帰しつつあった。その視座からヨハネは「七人の王」を見たが、そのうち五つは1798年にはすでに倒れており、一つの王国が1798年に存在していて、それがアメリカ合衆国であった。しかしその後、十人の王から成る別の王国が到来する。というのも、ヨハネが立っていた1798年の時点では第七の王国は未だ到来していなかったからである。この十人の王は日曜法の危機のひとつの間だけ支配し、彼らは自らの第七の王国を、1798年に致命的な傷を受けた第五の王国の獣に与えることに同意する。

数「8」は復活を表す。そして、間近に迫る日曜法において生起する竜・獣・偽預言者の三者連合の時にその致命的な傷が癒されると、教皇権は「七のうちに属する八番目」である。2020年、グローバリストたちはトランプから選挙を奪い取り、彼は黙示録十一章の街路で殺害された。黙示録十一章の二人の証人は、地から上ってくる獣の二本の角を表し、両者とも2020年に殺された。トランプは、1989年の終わりの時において、レーガン以降の六番目の大統領である。しかし2024年現在、彼はまた、先の七人の王のうちに属する八番目でもある。2024年に、その致命的な傷は癒され、幻を確立する預言的象徴と完全に一致して、同時に「七のうちに属する八番目」となった。ローマがなければ、ローマの像の動向を追う能力はない。

## MAGA

ネロの「250」年が満了する時にトランプがコンスタンティヌス大帝であること、あるいは紀元前207年に彼が大王アンティオコスであること、さらにはアメリカを「偉大」にすることを前提とする彼の黄金時代運動全体において彼が最後の大統領であることを理解するためには、当該章がまずトランプと彼の預言的役割に言及していることを認識する

必要がある。

ヘブライ文字の第1・第13・第22の文字から成る「真理」という語によって表象される「真理」の刻印は、第一の文字をレーガンに、また、前任の異端審問所の長の後を初のイエズス会出身の教皇が継いだ2013年に示されるように、叛逆の第十三の文字をオバマに比定する。異端審問所の長が退任したため、その終点はイエズス会教皇の始点と一致する。オバマにとっての二人の教皇の間のその接点は2013年3月13日であった。オバマは叛逆の第十三の文字に符合し、第二十二の文字はトランプである。

合衆国憲法修正第22条は大統領の任期を二期に制限しており、二期務めた大統領のうち、その任期が連続していなかった者を考えると、二人しかいない。グローバー・クリーブランドは非連続二期大統領のアルファであり、トランプはそのオメガである。グローバー・クリーブランドは第22代大統領であり、クリーブランドに対するオメガとしてのトランプは、「22」というアルファの標識を帯びている。クリーブランドとトランプは、ヘブライ語アルファベットの第二十二文字の象徴性を含みアルファとオメガを体現している。非連続の二期を務めた大統領は二人しかおらず、トランプはその二人目である。オメガの「二」とアルファの「二十二」を掛け合わせると「四十四」となり、これは1844年の象徴である。それは、1844年の閉ざされた戸によって型示されるように、日曜法における閉ざされた戸の象徴である。トランプは大統領となった異なる人物としては第44番目であり、日曜法において戸が閉ざされる時、彼が大統領である。

トランプはキュロス大王によって予表されてきた。キュロス大王は第一の勅令を発し、アルタクセルクセス大王は第三の勅令を発した。第一と第三は互いに呼応する。なぜなら、イエスは常に初めをもって終わりを示されるからである。ネロの「250」年の終結はコンスタンティヌス大帝によって表象され、その時にトランプが在る。紀元前457年から数えた「250」年の終わりに、トランプはアンティオコス大王によって表され、彼は十三節の成就として2024年に以前よりも強く戻ってきた。

北の王は帰還し、以前のものよりも大いなる軍勢を整え、幾年かの後、必ず大いなる軍勢と多くの富を伴って来る。ダニエル書 11:13

日曜法のもとでアメリカ合衆国がローマに征服されると、世界のすべての国々はローマに屈服することを強いられる。

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」『証言』第6巻、395頁。

「異邦の国々」は、間もなく到来する日曜法の時に国際連合の主導権を握る合衆国によって、そのようにすることを強いられる。国際連合は、イゼベルと結婚している北の十部族の王アハブに支配されている、黙示録十七章の「十人の王」である。イゼベルとアハブの結婚は、間もなく到来する日曜法において成就する婚姻である。日曜法において、合衆国、すなわちダニエル書十一章の「麗しの地」にして、黙示録十三章の「地から上る獣」は、聖書予言における第六の王国としての歴史を終える。カルメル山において、バアルの八百五十人の預言者と、イゼベルの食卓で食した木立の祭司たちは、エリヤによって殺された。合衆国は、カルメル山での偽預言者たちがそうであったように、間もなく到来

する日曜法において討たれる。その後の物語は、エリヤと、アハブおよびイゼベルとの対峙であり、アハブは、イゼベルと最初に姦淫を犯した者によって統治される十重の王国を表象する。イゼベルはあらゆる王国と姦淫することを意図しているが、アハブはその最初のものを表し、カルメル山で死ぬのは合衆国であり、直ちにイゼベルの最初の愛人となる。ダニエル書十一章の観点から言えば、まさにその日曜法の時に、トランプが、アレクサンドロス大王によって表象されるギリシャの力ある王として立ち上がる。

やがて一人の強大な王が興り、大いなる権勢をもって支配し、自らの意のままに行うであろう。ところが、彼が興ったのち、その王国は打ち砕かれ、天の四方へと分割される。それは彼の子孫のものとはならず、また、彼が治めていたときの権勢に見合うものでもない。というのも、その王国は根こそぎにされ、彼の子孫以外の他の者たちに与えられるからである。ダニエル書 11:3, 4.

ドナルド・トランプは、国際連合における「強大な王」として起つ。この「強大な王」は、その聖句の中で表され、その後アレクサンドロス大王の歴史によって典型的に示される。彼が起つとき、聖書預言における第六の王国であるアメリカ合衆国は終焉を迎え、黙示録十七章における十人の王による第七の王国が始まる。十人の王は、その時その場で、自らの第七の王国を教皇権に譲り渡すことに同意することによって、その第七の王国を開始する。教皇権は、前の七つに属する第八の王国である。彼らの合意は神の御旨を成就するためのものであり、その御旨は真理の聖書全篇にわたり、行に行を重ねて示されている。

## ローマの予表

ダニエル書十一章の第五節から第九節は、同章三十一節から四十節において示されている教皇権の歴史を完全に予表する預言的歴史によって成就した。第五節から第九節における歴史の流れは、三十一節から四十節における歴史の流れと並行している。両者はいずれも、教皇ローマを代表する権力がまず三つの障害を克服し、一定の期間支配し、やがて協定が破られて、その結果南の王が彼らに臨み、致命的な傷を与えるに至るという一時期を指し示している。これら二つの線を精査して歴史と比較すればするほど、それらがいかにきわめて正確であるかがいよいよ明らかになる。その正確さは、諸節の内部構造をどれほど緊密に表現しているか、また、それらの節を成就した歴史をどれほど厳密に反映しているか、という点に関わっている。

当該五つの節を成就した歴史は、三十一節から四十節に示されている教皇ローマの歴史と並行し、これと符合しており、さらに十節から十五節におけるアンティオコス大王の導入のための舞台を整えている。

しかし彼の子らは奮い立って大軍を集め、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り過ぎる。やがて彼は引き返し、彼の要塞に至るまで再び奮い立つ。ダニエル書 11:10.

十節の成就として、アンティオコス大王はエジプトの要塞に至るまで勝利を重ね、兵力を再編するためにそこで戦役を終えた。その歴史は、同章四十節に示されているとおり、1989年におけるソビエト連邦の崩壊を予表している。

終わりの時には、南の王が彼に攻めかかり、北の王は戦車と騎兵と多くの船を従えて、つむじ風のように彼に向かって来る。彼は諸国に侵入し、洪水のように押し流して通り過ぎる。ダニエル書 11章40節。

十節の「必ず来たり、氾濫し、通り過ぎる」という句は、ヘブライ語原文において、四十節の「彼は諸国に入り、氾濫して通り越す」と同一である。両節はいずれも、北の王（十節ではアンティオコス、四十節ではレーガン）が南の王（十節ではプトレマイオス、四十節ではソビエト連邦）を打ち破る時を指し示している。いずれの攻撃も、南の王の先行する勝利（五～九節のプトレマイオス、四十節のナポレオン）に対する報復であった。南の王が攻撃に出た動機は、破られた盟約にあった（五～九節のベレニケの婚姻、およびナポレオンとの1797年のトレンティーノ条約の破棄）。これらの節に表象された予言的構造と、その後の歴史における成就とは、イザヤ書8章8節とも符合する。

彼はユダを通り抜け、氾濫して押し寄せ、越えていき、首にまで達する。伸ばしたその翼は、インマヌエルよ、あなたの地の広がりを満たす。イザヤ書 8:8

イザヤがセンナケリブの軍勢が「氾濫して越え行く」と預言するとき、それは第10節と第40節におけるのと同じのヘブライ語語句である。イザヤは、それが北の王センナケリブが南王国ユダを征服した時のことであると指し示しているが、彼は「首にまで」達したにすぎなかったため、エルサレムはそのまま残された。これは、第10節でアンティオコスが国境にまで至ったのと同様である。センナケリブの動機は、ヒゼキヤが取り決められていた貢納を停止することによってアッシリアとの条約を破ったという点にあった。この条約破棄に関する点が、三つの並行する節における異例である。三つはいずれも条約破棄を含むが、プトレマイオスとナポレオンの場合には、条約を破ったとされたのは北の王であった。これに対して、北の王センナケリブは、定められた貢納の支払いを拒んだとしてヒゼキヤを非難した。

さて、ユダの王ヒゼキヤの治世第十四年に、アッシリアの王センナケリブが、ユダの城壁で囲まれたすべての町々に攻め上り、それらを攻め取った。そこでユダの王ヒゼキヤは、ラキシユにいるアッシリアの王のもとに使者を遣わして言った、「私は過ちを犯しました。どうか私から退いてください。あなたが私に課すものは、私が負います。」そこでアッシリアの王は、ユダの王ヒゼキヤに、銀三百タラントと金三十タラントを科した。ヒゼキヤは、主の宮に見いだされた銀、および王宮の宝物庫にある銀をことごとく彼に与えた。列王記下 18:13-15

センナケリブの北方の軍勢は、エルサレムへの行軍の途上でユダの四十六の都市を占領した。イザヤ書8章8節が十節および四十節と結び付いていることは大きな予言的意義を持ち、かくして、1989年におけるソビエト連邦の南の王国の崩壊に対する第三の証しを与えている。その崩壊は、四十節において空白となっている期間の始まりを画する。1989年における四十節の成就から、間もなく到来する日曜令を表す四十一節に至るまで、四十節には空白の期間がある。その期間は1989年に始まり、日曜令で終わる。四十節自体はその期間について何も語っていないが、四十節は行に行を積み重ねる方法論によって理解することができる。

第四十節の秘められた歴史を確立するための主要な「鍵」は、北王国が南王国に対して遂行した勝利の報復戦についてのイザヤの証言である。アッシリアに「貢納」を供するという既往の約定の遵守を中止したヒゼキヤの反逆であれ、アンティオコスによるベレニケの排斥であれ、あるいはナポレオンのトレンティーノ条約であれ、これら三節はいずれも、攻撃の根底にある動機として破られた条約を強調する歴史によって成就した。オバマ政権期、ジョン・ケリーの下で国務省において、次官補ヴィクトリア・ヌーランドがウクライナ政府を打倒するためのカラー革命を引き起こした。その時点以後、ウクライナ戦争をめぐる一つの論争には二つの立場が存在する。プーチンは、それは破られた条約であったと主張し、彼の反対者たちは、プーチンが指し示す条約は、プーチンが主張する文脈においては存在しなかったと言う。条約が実際に締結されてその後破られたのか、あるいはその逆であったのかは問題ではない。というのも、預言の記録は、戦争の動機として破られた条約があったことを、単に記録しているにすぎないからである。

イザヤ書8章8節は、北の王が首まで、すなわち頭に至るところまでしか征服しないことを理解するための「鍵」を与える。その「鍵」は、1989年に身体が崩壊した後に立ち残った頭としてロシアを特定する。8節の預言的意義は、頭を識別するという「鍵」にのみ存するのではない。むしろ、頭、すなわち首都を表す「首」の同定は、イザヤ書8章における同一の幻の先行箇所と結びつけてのみ確立されうる。その幻は7章に始まり、同章7節と8節において、頭は王、あるいはその王国、もしくは王国の首都と定義されている。エルサレムはユダの首都であり、ユダの46の都市はセンナケリブの軍によって征服されたが、センナケリブは首都エルサレムを攻め落とさずに残した。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書7:8、9

紀元前701年、セナケリブの軍勢がエルサレムの城壁まで進軍して来たとき、彼は「首」にまで迫り、このことにより、1989年の崩壊の後にもロシアが存続することの歴史的証言を残した。大アンティオコスが南の王国に対する報復を開始したとき、10節において彼はエジプトの国境にまで来たが、入らなかった。10節におけるアンティオコスの勝利の意義は、それが、明確な会戦を欠きながら、かつて失われた地理的領域を再確立するという彼の業を示す軍事行動の終結を画する点にある。10節における彼の征服は、いくつかの勝利の終結を示している。彼は第四次シリア戦争の遠征をラフィアで終結させたが、ラフィアとは「国境地帯」を意味し、ラフィアはエジプトの国境、すなわちエジプトの「首」であった。紀元前219年から紀元前217年にかけてのアンティオコスの遠征は、1989年におけるソビエト連邦の崩壊が1991年に至るまで「氾濫し、過ぎ越す」こと、すなわち王が諸国を過ぎ越した時を表している。

預言的に言えば、イザヤ書8章8節は、セナケリブの戦いにおける「首」あるいはアンティオコスのそれにおける「要塞」としてのロシアを、十一節の成就によって示されているように、ラフィアの戦いにおける南の王として同定することを可能にする。こうして、それは、竜（南の王）、獣（北の王）、および偽預言者（北の王の代理勢力）によって表象される外的歴史を、七章七節の六十五年の預言によって表象される内的な預言の系

譜と、直接に結びつける。

預言的観点からすれば、センナケリブがエルサレムに上って来たことの意義は、聖書における神の力の最も力強い預言的証言の一つをなしている。というのも、そこで神は一夜のうちにセンナケリブの十八万五千の軍勢を滅ぼされたからである。その前日、エルサレムの城壁の上にはエルヤキムとシェブナの両者がいたが、彼らは、1844年の閉ざされた戸と日曜法の閉ざされた戸において印を付されるラオディキア的およびフィラデルフィア的アドベンティズムの象徴である。

さて、ヒゼキヤ王の第十四年に、アッシリヤの王センナケリブがユダのすべての堅固な町々に向かって攻め上り、これを攻め取った。アッシリヤの王はまた、ラクシュから大軍を率いて、ラブ・シャケをエルサレムのヒゼキヤ王のもとへ遣わした。彼は上の池の水道のかたわら、さらし野の大路に立った。すると、宮内長官であるヒルキヤの子エリヤキム、書記官シェブナ、記録官アサフの子ヨアが、彼のもとに出て来た。イザヤ書 36:1-3。

イザヤ書第七章において、イザヤは、南王国ユダの王である悪しきアハズに使信を携えて遣わされる。その王国こそ、八章八節でセンナケリブが攻めている王国である。イザヤが悪しきアハズ王に会ったのは、「さらし場の大路にある上の池の水道のところ」であり、そこはまさにラブシャケが主の御名を冒瀆した場所である。イザヤは、自分とその子らがしるしであると教えた。

見よ、私と、主が私に与えられた子らは、イスラエルにおいて、シオンの山に住んでおられる万軍の主からのしるしと不思議である。イザヤ書 8:18

イザヤが「さらし屋の野の大路にある上の池の水道のそばで」悪しき王アハズと会ったとき、イザヤはその子シェアル・ヤシュブを伴っていた。これは「残りの者は帰って来る」という意味である。

そのとき、主はイザヤに言われた。「あなたとあなたの子シェアル・ヤシュブは、今、出て行って、さらし野の野の大路にある上の池の水道の端でアハズに会いなさい。」イザヤ書 7:3。

シェアル・ヤシュブは、イザヤが「さらし職人の野への大路にある上の池の水道の端」において宣言したメッセージが、帰ってくる残りの者を指し示すものであることを明らかにしている。その残りの者とは、『マラキ書』において、主のもとに立ち帰り、また十分の一を宝物倉に携えて帰すことによって主を試してみるようにと召されている人々である。帰還する者たちはまた、最初の失望の後に帰ってくる者として、エレミヤによっても表象されている。七章では、「さらし職人の野への大路にある上の池の水道の端」が、イザヤが南王国の邪悪な王にメッセージを与える場面を描いており、イザヤ書三十六章では、エリヤキム、シェブナ、そして書記官ヨアがヒゼキヤに代わって対応し、ラブシャケはセンナケリブを代表した。

「さらし工の畑の大路にある上の池の水道の端」における最初のメッセージはイザヤとその子によって宣言され、同じく「さらし工の畑の大路にある上の池の水道の端」における最後のメッセージは三人によって宣言された。最初のメッセージは内部の王に対する

ものであり、第二のメッセージは外部の王に対するものであった。境界線は壁であり、それは神の律法の象徴である。また、政教分離の壁の撤去を表すのが日曜法である。日曜法、すなわちこの壁のところには三つの象徴がある。エリヤキムはフィラデルフィヤ、シェブナはラオデキヤ、書記官ヨアブはサルデスである。

日曜法の時、ダニエル書11章41節によれば多くの者が倒されるが、その者たちは第七日安息日に関する光について責任を問われる者たちである。41節で倒される者たちはラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチストであり、エリヤキムはフィラデルフィアを象徴する。

その日には、わたしはわがしもべヒルキヤの子エリヤキムを召し、あなたの衣を彼に着せ、あなたの帯を彼に締めさせ、あなたの政務を彼の手に乗ねる。彼はエルサレムの住民とユダの家との父となる。わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開けば、だれも閉じず、彼が閉じれば、だれも開かない。イザヤ書 22:20-22。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。聖なる方、まことの方、ダビデの鍵を持つ方、開けばだれも閉じることができず、閉じればだれも開くことができない方が、こう言われる。わたしはあなたのわざを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。だれもそれを閉じることができない。あなたにはわずかな力があり、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。見よ、自分はユダヤ人であると言いながら実はそうではなく、偽っている「サタンの会堂」に属する者たちを、わたしは来させ、あなたの足もとでひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを彼らに悟らせよう。ヨハネの黙示録 3:7-9

シェブナはエリヤキムに代えられ、城壁上のシェブナは、初雨または後の雨のメッセージによって益を受けることを拒むラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチストを表している。教会における初雨は、イザヤと帰還した余民によって表され、そのメッセージは、邪悪な王アハズに象徴される背教の教会に向けられていた。城壁からのメッセージは、エルサレムを打ち負かそうとしていた邪悪な北の王に与えられ、それは初雨との関係における後の雨を表している。神の教会が審判されている間、初雨すなわち前の雨は霧雨のように降るが、日曜法の時には、その雨は限りなく注ぎ出される。アハズへのメッセージは内部的メッセージであり、センナケリブへのメッセージは外部的である。黙示録18章1-3節の第一の声は第二の天使のメッセージの繰り返しであり、内部的である。黙示録18章4節の第二の声は外部的であり、第三のメッセージである。イザヤとその子は内部的な第二の天使のメッセージを携えて来た。城壁の上では、外部的メッセージに関して三つの魂が存在する。

エリヤキムは十四万四千人である。シェブナは、その時、主の御口から吐き出されるラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチズムである。記録官ヨアブは、城壁に至るまでの歴史を記録する神のほかの羊の群れを表す。彼らがそうするのは、エリヤキムの旗印が掲げられるときにそれを識別するためである。

イザヤ書8章8節は、イザヤ書6章から12章にわたるメッセージをダニエル書11章10節へと持ち込む。そうすることにより、攻撃後にも王国の元首が倒れずに立ち続けていることについての第二の証言を与える。また、戦闘を誘発するために用いられる、条約が破られた

という主張を明示する。

1989年のソ連崩壊（第四十節）から、次の節に象徴される間もなく到来する日曜法に至るまでには、三十七年に及ぶ預言史が存在するが、第四十節はそれについて何も述べていない。ダニエル書十一章十～十五節は、第四十節で取り上げられていないその預言史を表している。それは、「行に行を重ね、教に教を重ねる」という方法論を用いるときのみ見いださう。「もしあなたがたが信じなければ、必ず確立されることはない」は、1989年を記述する三節に付されている予言的警告であり、イザヤ書八章八節の歴史的成就是、エリヤキムとシェブナに対する試練を描写している。あなたがたは見えるのか、それとも盲目なのか。

ダニエル書11章41節は、同章16節を成就した歴史によって予表された、アメリカ合衆国において間もなく制定される日曜法である。

しかし、彼に向かって攻めて来る者は、自分の思うままに行い、誰も彼の前に立つことはできない。彼は麗しい地に立ち、その地は彼の手によって滅び尽くされる。ダニエル書 11:16

彼はまた麗しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

ダニエル書十一章の十六節から三十節に至るまでの歴史的成就是、異教ローマの歴史である。ダニエル書十一章におけるすべての予言的叙述は、異教ローマ、教皇ローマ、あるいは現代ローマの歴史を予表している。すべての叙述は、直接にローマの歴史を指し示すか、将来のローマの歴史を予表するのである。すべてである。異教ローマによって成就した歴史を直接に指す諸節は、教皇ローマを予表している。異教ローマと教皇ローマは共に現代ローマを証言する。ローマがこの幻を確立している。というのも、この章の初めから終わりに至るまで、その幻はローマについてであるからである。

イエスは、ユダの裏切りが明らかになったときに弟子たちが信じるよう助けるため、裏切り者の存在を示された。

「ユダに対して『災い』を宣告されたとき、キリストはまた、弟子たちに対する憐れみの目的をもお持ちであった。かくして主は、ご自身のメシア性の決定的証拠を彼らにお与えになった。『それが起こる前に、あなたがたに言うておく。起こったときに、あなたがたが、わたしがI AMであると信じるためである』と主は言われた。もしイエスが沈黙を守り、ご自身に降りかかろうとしている事柄について無知であるかのように見受けられたなら、弟子たちは、自分たちの師には神的な先見がなく、殺意に満ちた暴徒の手に不意を突かれ、裏切られて引き渡されたのだと考えたかもしれない。それより一年前に、イエスは弟子たちに、十二人をお選びになったこと、そしてそのうちの一人は悪魔であることを告げておられた。いまや、ユダに向けられた主の言葉——その裏切りが師に完全に知られていたことを示す言葉——は、主の受難と辱めの時において、キリストの真の弟子たちの信仰を強めることとなるであろう。そしてユダがその恐るべき最期に至ったとき、彼らは、裏切り者に対してイエスが宣告されたその『災い』を思い起こすであろう。」The Desire of Ages, 655.

2023年12月31日、ユダの部族の獅子がご自身に関する啓示の封印を解き始め、基礎的な試験が始まった。その試験は、第十四節において異象を確立する象徴が依然としてローマであるのか、あるいは状況が変化したのかをめぐるものであった。2025年5月8日に米国から出た第一の反キリストが支配を開始したとき、第十四節は成就していた。その時、トランプと教皇レオとの関係が、レーガンとヨハネ・パウロ二世によって予表されていたことが明らかになった。2014年、合衆国国務省がウクライナでカラー革命を引き起こしたときに始まったウクライナ戦争は、二人の教皇の在位期にまたがって在任していたオバマの大統領任期中に起こった。第十節はレーガンとヨハネ・パウロ二世に対応し、そして2014年には、第十一節の「境界地の戦い」すなわちラフィアの戦いによって表象されるウクライナ戦争が始まった。ラフィアは「境界地」を意味し、「ウクライナ」という語も同様である。その歴史において、オバマと二人の教皇が、第十節から第十五節にわたる三つの戦いのうち第二の戦いを画する。そして2024年には、第十三節の成就としてトランプが復帰した。さらに第十四節においては、トランプの教皇的対応者の到来によって、その異象が確立される。

確立されたのは、10節から15節にかけての三つの戦いが、日曜法におけるカルメル山へと至る途上でイゼベルとアハブの関係をそれぞれ指し示す三つの道標を表しているということである。レーガンの時代には、イゼベルはサマリアにあって、秘かな同盟によって隠されていた。ついで、バアルの祭司と林の預言者は、“woke”リベラル・カトリシズムの心霊主義を、背教的プロテスタンティズムの偽預言者とイスラームの偽預言者双方を示すオバマの統合失調症的象徴性、母なる大地の崇拜、ならびにフランス革命の放縦とアナーキーと結び合わせて掲げた。その後、2024年にトランプが帰還し、2025年には獣とその像との公然たる関係が顕在化した。2026年となり、基礎に関する外的な視野の試験は通過し、われわれはいま神殿に関する視野の試験の只中にある。

第十一節は、紀元前217年のラフィアの戦いにおいて成就し、2014年に始まり2022年に激化し、現在終結の瀬戸際にあるウクライナ戦争を予表している。プーチンは勝利を収めるだろうが、その勝利は彼の没落の始まりを告げるにすぎない。第十一節の預言的構造と、その成就としての紀元前217年ラフィアの戦いにおけるプトレマイオスの勝利（すなわち第十一章第十一節の成就）は、ウジヤ王の預言的歴史と符合する。プトレマイオスもウジヤも南の王であり、軍事的成功のゆえに心が高ぶったが、その高ぶった心が両者を没落へと導いた。そして両者の没落は、それぞれがエルサレムの聖所で供え物をささげようと試みたことと結び付けられている。

次稿では、第十五節のパニウムの戦いへと至るプーチンの終焉について、引き続き考察する。